

## 「覚え違いタイトル集」

青木優

図書館勤務の私が最近気になっているのは、「覚え違いタイトル集」という、福井県立図書館公式サイト内にある特集ページである([http://www.library-archives.pref.fukui.jp/?page\\_id=368](http://www.library-archives.pref.fukui.jp/?page_id=368))。

利用者が探している本について司書に相談(レファレンス)した時、利用者が誤って覚えていたタイトル(や著者名)と、それをもとに司書が探し出した答えを記録したもので、二〇一八年七月二十五日時点で六百八十四件登録されている。思わず吹き出してしまうレファレンス例に、図書館周辺の話題を紹介するポータルサイトで取り上げられるなど、図書館業界でも一時話題になった(カレントアウェアネス「E967 福井県立図書館「覚え違いタイトル集」ができるまで」(<http://current.ndl.go.jp/e967>))。

利用者の相談で「100万回死んだねこ」を探している(正しくは「100万回生きたねこ」といったものや、別の相談では「背中を蹴飛ばしたい」(正しくは「蹴りたい背中」)といったものがある。これらは、比較的有名なタイトルの覚え違いであり、このリストを見ている私たちでも正解が

すぐ分かり、思わずクスツと笑ってしまうものである。

それでは次の例はどうだろうか。「男の子の前で『なんとかのカバン』」。この情報のみ聞いた時に、質問者が求める資料を即座に出すことは難しいのではないだろうか。答えは「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」であった。また他にも「寺山修司の詩集『ワレニサツキヲ』」(正解は『わにに五月を(ワレニゴガツヲ)』)、「丘の上のライオン」のようなタイトルの小説。ひらがなの名前の歌手が書いた本(答えはさだまさし著『風に立つライオン』)など、ヒントはあるが調査が必要な質問である。例のように質問者の記憶は必ずしも正確ではない。提供された情報をもとに言い換えたり、質問を重ねたりして本当に求めているものを調査する。いずれにせよ、いかに短い時間で正しい資料を探し当てるかは司書の腕にかかっていると言いうことができる。

私はこのリストを見ることで時に仕事の励みとし、またある時はレファレンスをよりよいものとするためにどうしたらよいか、を考えるきっかけにしている。レファレンスサービスと言われる業務には、いくつか大切な要素がある。一つは何を調べれば的確な回答ができるか、を知っているという点がある。質問者が知りたい分野に精通している必要はないが、何を調べれば質問者が求め

ている知識にスムーズにアクセスできるか、ということとは把握しておく必要がある。そのため私も日々参考資料を参照したり、自館に何を所蔵しているか把握したりするようにしている。他にも要素はあるが、今回のリストから読み取れることは知識の蓄積、情報の共有である。一人一人がレファレンスに応える能力を身に付けることも重要であるが、これまでの質問回答集を集めておくことも役に立ちそうである。過去の事例を参照・共有できるようにしておく、と、「そういえば過去にこんな質問があった……」と、それをきっかけにして質問に答えられる可能性が広がる。今回紹介した「覚え違いタイトル集」も、一見すると些細な間違いのように見えるが、「覚え違い」という角度からこのように多い件数を集めることで、タイトルの間違い例などのパターンを読み取ることができ、価値あるリストとなっている。私は司書としての経験が浅いため、自身の過去の事例を参考として答える、ということとは難しいが、これまでの経験を記録している。このように自身の記録を読み返したり、「覚え違いタイトル集」等の事例集を参考にしつつ、経験を次の相談に活かしてより良いレファレンスサービスを提供していきたいと考えている。